真澄

MASUMI

No.39

秋田県立博物館【菅江真澄資料センター】

真澄部門職員による板碑の拓本採取（2021.6.6）
湯沢市皆瀬白沢にて
拓本（右）は、指導の藤田守氏採取

種子は、㊤ヴァン（金剛界大日如来）㊦アーク（胎蔵界大日如来）

「真澄」は、菅江真澄資料センターの活動を紹介する広報紙です。

第84回企画コーナー展

おらほの真澄
―能代・山本―

令和3年
3月20日（土）～5月16日（日）

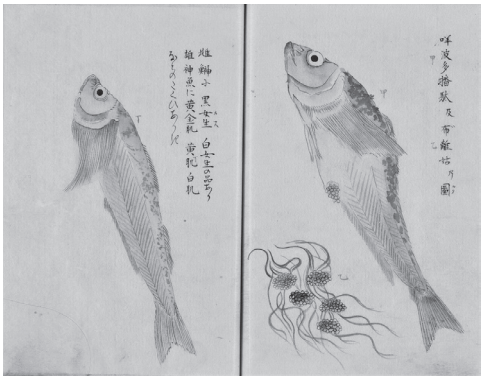
県の北西部に位置する能代・山本地域に焦点を当て、真澄が同地域を歩いた際の記録について紹介しました。能代・山本地域とは能代市・藤里町・三種町・八峰町の一市三町のことを指します。真澄は、享和元年（一八〇一）から、文化七年（一八一〇）頃までの約九年の間に複数回、同地域を訪れています。そして風景、名所旧跡、土地の名産や人々の暮らしぶりなど、様々な内容について記録しました。記録された日記（紀行文）は全部で9冊になります。展示では真澄の足跡を追いながら、日記ごとにそれぞれの土地にまつわる内容をいくつか抽出して紹介しました。

※紹介している図絵はすべて館蔵写本のものです。

真澄による八森ハタハタ考

（山本郡八峰町八森岩館）

日記『雪の道奥雪の出羽路』で、真澄は八森でとれたハタハタの精緻な図絵を描いています。オスとメスを区別し、その体表の色や大きさの違いまでも詳細に記録しました。また漁に用いる道具やハタハタの卵（ブリコ）を岩場で集める女性なども描きました。三河生まれの真澄にとってハタハタは非常に珍しい魚で、関心が高かったことがうかがえます。


『雪の道奥雪の出羽路』

さて、そうした真澄の記録の中に、「八森はたはた雄鹿ぶりこという諺（ことわざ）が（当地には）ある」という記述が出てきます。県民の多くが知っている秋田音頭にも「秋田名物八森ハタハタ、男鹿で男鹿ブリコ」という歌詞がありますが、八森も男鹿もハタハタの漁獲地として広く知られており、どちらでもブリコはとれます。それにも関わらず、なぜ八森ハタハタ、男鹿ブリコなのでしょうか。

その答えとして真澄は、

「八森の岩館浦などは岩場が多く、ブリコが波に打ち当てられ、運ばれたときには完全な形で残っているものはほとんどない。一方、男鹿は南北の浦とも藻が多く生え、ブリコが完全な姿で残っている。このことをもってそのように言われている」

と、記しています。

宮ノ目の大桜

（山本郡三種町下岩川宮ノ目）

日記『かすむ月星』には真澄が花を愛でながら各地を歩く様子が記されています。桜が盛りを迎える旧暦三月、真澄は宮ノ目で道端に咲き誇る桜の大木を見ました。あまりの見事さに驚き、それに先立って見た能代市檜山の桜とどちらが見事であるかを、同行の人々と「花争（はなあらが）い」をしました。

『かすむ月星』

銀杏山神社の連理の銀杏

（能代市二ツ井町仁鮒）

能代市二ツ井町銀杏山神社の境内奥に、根元近くの枝が癒着したように連なる二本の銀杏の大木があります。日記『みかべのよろい』で真澄は、その銀杏の図絵を描きました。また連なる枝の下には小さな祠が置かれ、真澄も背をかがめて参拝したと記されています。

『みかべのよろい』

不動滝（素波里不動滝）

（山本郡藤里町粕毛）

日記『しげき山本』で、真澄は現在の藤里町・素波里ダム近くにある不動滝を図絵に描きました。真澄が描いた滝を見ると、滝の右側手前と左側奥に見物人がいるのが分かります。さらに目を凝らしてよく見ると、滝の裏側にも人影が二つ確認できます。

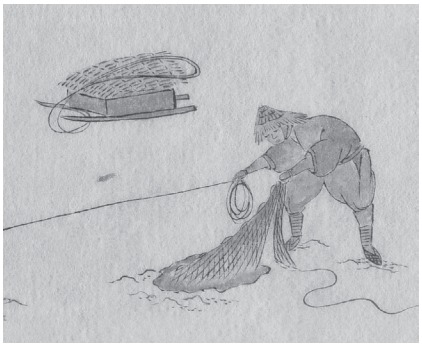
この滝は真澄が図絵に描いている通り、滝の裏側からも水が流れ落ちるさまを見ることができる「裏見」の滝です。

『しげき山本』（部分拡大）

氷下漁をする漁師

（山本郡三種町鰺川）

日記『氷魚の村君』では結氷した八郎潟での氷下刺網漁の様子を図絵に描いています。傍らには漁具を運ぶそりも見えます。その晩、鰺川の漁師宅に泊まった真澄は、遅くまで網の手入れをする漁師の姿を目にします。



『氷魚の村君』（部分拡大）

蝙蝠渕（こうもりぶち）の橋

（山本郡八峰町峰浜目名潟）

日記『おがらの滝』に描かれた蝙蝠渕とは、水沢川の流れの中にできた渕です。その名の通り、蝙蝠が多く住む窟が近くにありました。図絵中で真澄が「あやうき橋」と評した橋が架かっていたあたりには、現在、蝙蝠渕橋という名の立派な橋が架かっています。

『おがらの滝』

真澄、能代春慶を見る

（能代市富町・万町（あら））

日記『雪の道奥雪の出羽路』で、真澄は能代春慶について次のように記述しています。

「この能代に有名な春慶塗の塗師が居る。春慶塗の技術をこの地に伝えた人の子孫で加賀屋三九郎という人が、今も三方・四方・折敷・掛盤（台脚膳）などを塗っている。

色合いもほのかで、山吹の花が露に濡れているように黄金（こがね）色に光っている。三九郎の弟子で、万町の荘九郎という者が塗った器が最もよいとされ、他国への土産としている。（中略）何もかもが秘伝として伝えられているという」

能代春慶の魅力を真澄は「山吹の花のような黄金色」と評しています。能代春慶の職人について『秋田人名大事典』（昭和四十九年）には「飛騨から春慶塗の技術を山打三九郎が伝え、石岡庄九郎がその門人となる」などとあります。真澄が記録した加賀屋三九郎とは、山打三九郎のこと、同じく荘九郎とは石岡庄九郎のことでしょうか。ちなみに石岡庄九郎の名は、後に石岡庄寿郎と改められ、その名は、春慶塗の技法と共に、代々一子にのみ受け継がれたと言います。

能代春慶塗　三峯（三方）館蔵
明治初期・石岡庄寿郎作

川尻の渡し

（山本郡三種町川尻）

日記『男鹿の春風』には舟で三種川を渡る様子が描かれています。船頭は櫂（かい）のようなものは持たず、両岸に結んだ綱を手繰り寄せて舟を進めています。川幅が狭い場所で用いた舟渡しの方法です。

『男鹿の春風』（部分拡大）

笛滝

（山本郡八峰町八森乙の水）

日記『浦の笛滝』の書名にもなっている笛滝は、現在「道の駅はちもり」の少し北側の地点から海に向かっておりた場所にあります。別の日記には「この滝の下で一晩寝ずに笛を吹いて滝の神に手向ければ、笛が上達すると言われる」と真澄は記しています。

『浦の笛滝』

第85回真澄企画コーナー展

大館・真崎文庫の真澄関連資料

真崎勇助

令和3年7月10日（土）
～9月5日（日）

大館市立栗盛記念図書館が蔵する真崎文庫は、明治から大正にかけて郷土史家として名を成した真崎勇助が収集した資料群です。真崎勇助の没後、遺族から大館の栗盛家に譲渡、戦後になって大館市に寄贈されました。真崎文庫には、菅江真澄の自筆資料である「菅江真澄著作」（県指定文化財）が含まれているほか、秋田県の歴史や文化史にかかわる貴重な資料があります。

菅江真澄資料センターは、開設以来、真崎文庫に関わってきましたが、特に平成二十八年（二〇一六）からは真崎文庫の内容を紹介する「真崎コレクション展」を大館市立栗盛記念図書館でおこない、その準備等の機会を得て同文庫の理解に努めてきました。

真崎文庫では、県指定文化財ばかりではなく、大館市指定文化財となっている資料の中にも、真澄の自筆が含まれる資料や真澄研究でよく語られる資料があります。中には、『菅江真澄全集』等で紹介されてこなかった資料もあります。

今回の展示は、五年にわたる「真崎コレクション展」の成果の一端を紹介したものです。

なお、本展開催のあと、大館市立栗盛記念図書館では、六回目となる真崎コレクション展「文庫内の叢書と菅江真澄」（十月二十九日～十一月七日）を開催しました。

大館市立栗盛記念図書館では真崎文庫を閲覧することができます。ただし、二階閲覧室にあるパソコンでの閲覧になります。また、県指定文化財のうち「菅江真澄著作」に関しては、インターネットで全丁を見ることができます。「大館市立図書館」で検索し、「菅江真澄著作集」のバナーから御覧ください。

展示で紹介した資料

（○印は本紙で紹介）

■自筆を含む資料

・乙随筆　（M―一二八）
・黒甜瑣語稿（一部）　（M―一七二三）
○祝詞　（M―九六）
・六郡郡邑記　（M―九七一）
・芳園拾遺（一）　（M―九一一）
○群書類従　（M―二八）
○雄平仙河秋山補陀落巡拝古跡記　（M―一一二）

■記録された真澄資料

・おほまあらこ　（M―一〇〇）
・やみ津々理八　（M―八―八）
・覚書　（M―一五〇）
・山入始末併考　（M―二九一）
・筆まかせ一編五巻　（M―一三―五）

■写された真澄

・道草　（M―一四一二）

○祝詞（のりと）（M―九六）

鎌田正家が板刻した六月晦日の大祓詞（みなづきみそかおおはらえのことば）である。この功績によって、藩庁から藩内の神職に教えるようにとの仰せがあったと、正家の墓碑銘には記されている。夏越の祓として知られる大祓詞は、もともとは『延喜式（えんぎしき）』巻八に書かれている。この板刻では、本居宣長が『大祓詞後釈（オオバラエノコトバゴシャク）』（寛政八年〈一七九六〉刊）で示した解釈に基づく読みとしている。本資料を収集し、真澄の筆跡に詳しい真崎勇助は、板刻の下書きが真澄のものであるとしている。

【鎌田正家による識語】

古文のあるが中にもいとも尊く妙なるは、これの祝詞になも有けるを、後世に至りては言の清濁はさらにもいはず、よみひがめたる言のおほかりしを、吾鈴屋ノ大人の考へ正されたる例のまに〳〵、皆人のあさよひによみなれむたよりともなしてむと、みづから桜木にゑりて折巻とはなしぬ。

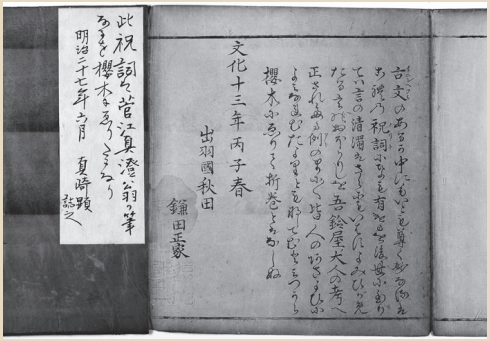
文化十三年丙子春　出羽国秋田　鎌田正家（印）

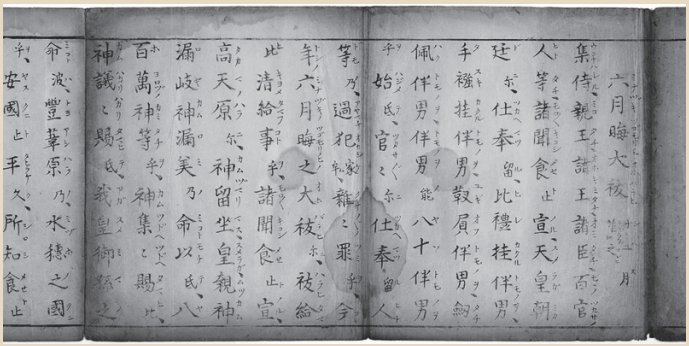
【右文章の現代語訳】

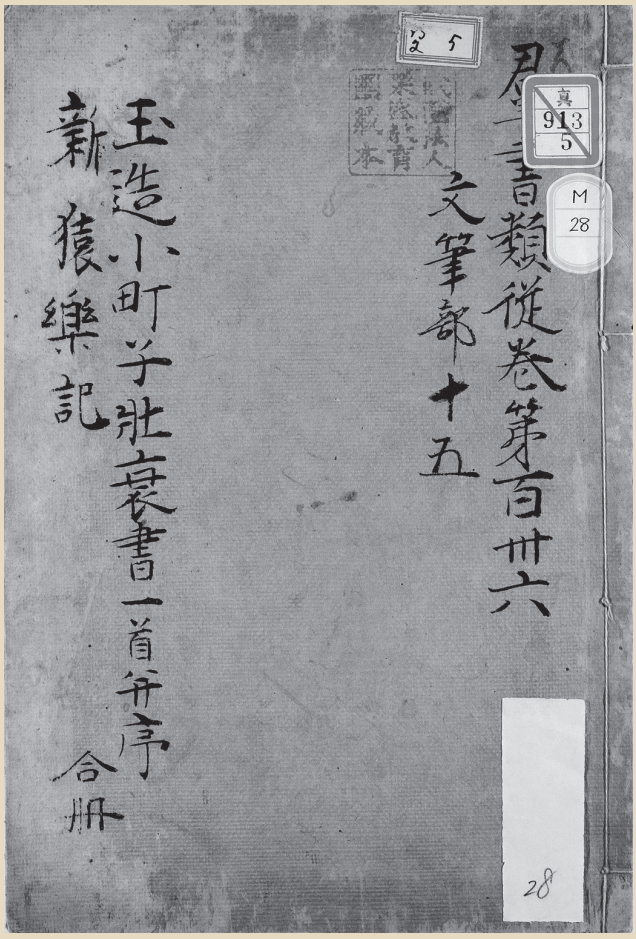
古い文章の中でも最も尊く霊妙なのは、ここに示す祝詞であるのに、後世に至っては言葉の発音についてはもちろん、解釈をゆがめられた言葉が多いのを、私が尊敬する本居宣長先生が正したものをそのまま示し、皆が朝夕に読む拠り所にしたいと、私自らが桜の木に彫って出版物にするものである。

【真崎勇助による識語―貼り紙―】

此祝詞は菅江真澄翁の筆
なるを桜木にゑりたるなり。
明治二十七年六月　真崎顕誌之







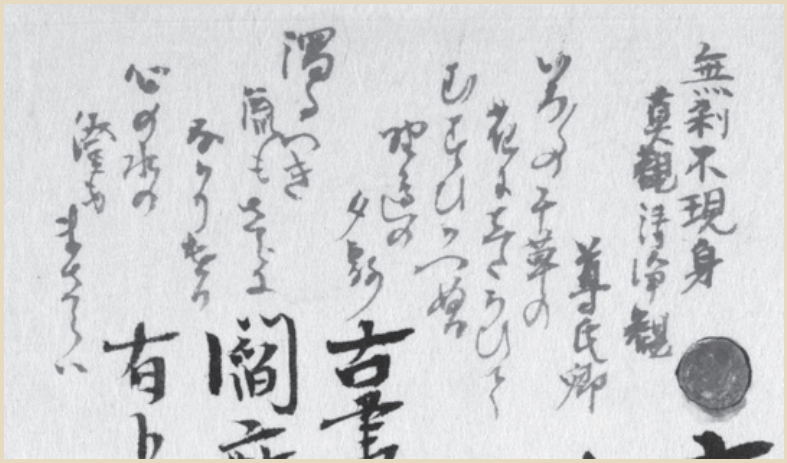
表紙

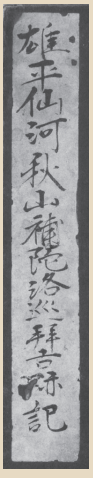
第一丁表

※第一丁表の右上に真澄所用印（読み方には諸説ある）が捺されている。ただし、真ん中にある○印は所用印とは関係のないものである。

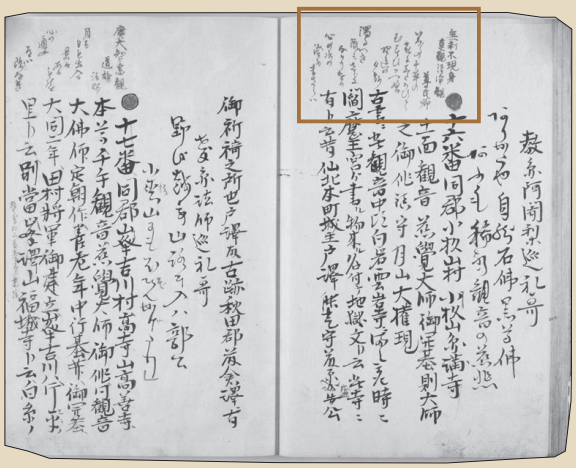
○群書類従（M—一一八）

「群書類従」は、盲目の学者として知られる塙保己一が、古代から江戸時代初期までになった史書や文学作品などを編纂した一大叢書。存命中に版行された正編は、一二七三種六六六冊に上る。また、保己一が計画し、没後に弟子たちが引き継いだ「続群書類従」は、二一〇三種一一八五冊に上る。本資料は正編の巻一三六で、「玉造小町」「新猿楽記」などを内容とする。真澄所用印が捺されていることに加え、表紙に書かれている文字は真澄の自筆である。このことから、真澄の手沢本であることがわかる。活字本は、『群書類従』第九輯にある。





表紙題箋



第十六番札所記述部分

○雄平仙河秋山補陀落巡拝古跡記（M—一一二）

本資料は、『秋田六郡三十三観音巡礼記』として知られる書冊である。秋田藩領三十三箇所の霊場と御詠歌が書かれている。活字本として『秋田叢書』第八巻、のち『新秋田叢書』第三巻に収められたが、本資料が直の底本とはなっていない（底本は明示されていないが、本資料の内容は「一本に」として翻刻されている）。表紙の文字と、中に書かれた天註の文字などが真澄の文字であることから、真澄の手沢本であったことがわかる。

※展示パネルでは、本資料に見られる訂正と、真澄の地誌《月の出羽路仙北郡十七》にある記述との整合性から、本資料が真澄の手沢本であったことを論証した。

※本資料の本文は他筆であるが、題簽や天註、それに訂正等は真澄によるものである。

第八十六回企画コーナー展

真澄の記録に見る 雨乞習俗

令和三年十月十六日(土)～十二月五日(日)

江戸時代、農業に携わる人々にとっての最大の関心は作物の出来を左右する天候にありました。特に雨、しかも農作業に必要なタイミングで雨が降るかどうかはまさに死活問題でした。そのため、人々は雨が降らない時には降雨を願う「雨乞」を行いました。真澄はそうした各地で行われていた多種多様な雨乞習俗について記録しています。

本展では、真澄が記録した雨乞習俗に焦点を当てて紹介しました。雨乞習俗というフィルターを通して、当時の人々の生活や思いについて考える機会になればと考え、企画しました。

雨乞和歌

平安時代の歌人・小野小町の生まれ故郷と言われる小野郷（現在の湯沢市小野）を訪れた真澄は、そこで土地の人々が語った小町にまつわる雨乞の話を記録します。かつて京の都で雨乞の和歌を詠み、見事に雨を降らせたという伝説をもつ小野小町は、雨乞小町とも呼ばれ、彼女の詠んだ和歌には不思議な力があったといいます。

日記『小野のふるさと』より意訳

ある年、日照りが続き、いよいよ田畑全てが枯れるとなった時、小町ゆかりの苅薬の辺で斎戒をして、

【ことはりや　日のもとなれば　照りもせめ　さりとてはまた　あめがしたとは】

（この国の名が日の本であるならば、日が照るのは理であろう。しかしまた、天が下〈雨が下〉ともいう。そうであれば雨を降らせてほしいものだ）

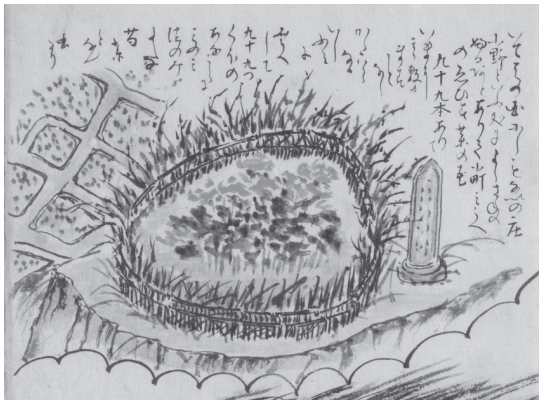
と、小町の雨乞の和歌を詠んだ。すると、たちまち雨が降ってきて、その効果を現した。（中略）小町の雨乞祈願の和歌には、世によく知られているこの和歌とは異なる、もう一つ別のものがある。

【ちはやぶる　神もみまさば　たちさはぎ　天の戸河の　樋口あけたまへ】

（荒ぶる神々よ、天の上から地上のこの旱魃の様を見ているのであれば、直ちに閉じられている天にある河の樋口を開けて雨を降らせてください）

という和歌であると聞いたので、この歌を詠んでみた。すると、この和歌でもまた雨が降った。あまりのことに身の毛がよだつが、ありがたいことだと人々は語った。

本文中に出てくる、人々が雨乞を行っていた「小町ゆかりの苅薬の辺」とは、小町自らが植えたとされる苅薬が咲く場所を指します。真澄もその場所を実際に訪れ、その様子を図絵に描いています。



小町が植えた苅薬　『粉本稿』より部分拡大
（大館市立栗盛記念図書館蔵）

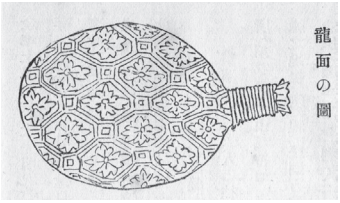
雨乞の面

神仏に舞楽を奉納し、雨を祈願するというのは、古くから各地で見られた雨乞の方法です。そして舞楽を舞う際には「面」が用いられました。真澄は雨乞に用いられた面について記録しています。

日記『男鹿の春風』より意訳

光飯寺遍照院（現在の男鹿市真山）に着くと、寺宝を見せてくれた。（中略）その中に竜王の面があった。それは厳重に秘められて袋に入れられ、わずかに袋の外側から触れさせてもらうことができただけだった。これは雨乞の時に用いる面で、（別当の）神主がこの面をかぶって舞うという。また、逆に雨が止まないときには、雨上げ（日乞）の面を用いて舞うという。「その面はこれだ」と言って、赤く塗られた鼻高（天狗・圧面）の面を出して見せてくれた。

面を付けた神主が舞楽を奉納し、雨や日を祈願する習俗であったということですが、雨上げの面が公開されているのに対して、雨乞の面は厳重に秘められ、袋に入った状態でしか見ることができなかったと真澄は記しています。残念ながら真澄はこれらの面について図絵を描いていませんが、鈴木重孝著『絹篩』嘉永五年（1852）には、この二面の図絵が描かれています。

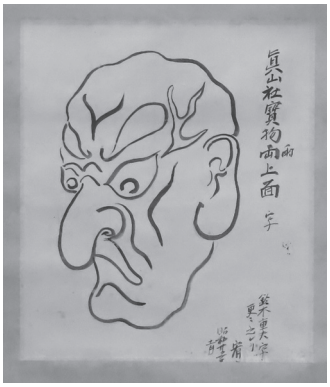


『絹篩』に描かれた二面の図
秋田叢書刊行会『秋田叢書』第二巻より部分拡大

雨乞の面の方は、真澄が見た時と同様、やはり秘められて袋に入ったままだったようです。ただ図絵からは立派な袋に大切にしまわれていたことが分かります。雨上げの面は「一体（全体）赤し」と『絹篩』の説明にありますので、真澄の記録の通り、赤く塗られた「鼻高」面の様相を呈していたことが分かります。

この二面は光飯寺廃寺によって真山神社に移され、その後、男鹿市北浦の日枝神社で保管されていました。しかし、大正八年の北浦大火で焼失したとされています。ところが、昭和に入ってから二面を図絵に描いた資料の存在が明らかになります。焼失前に写真などに収めていたものを図絵に描いたのでしょうか、いずれ実際の二面の様子を知る上で貴重な資料です。特に、これまで明らかになっていなかった雨乞の面について、その詳細を知ることができます。現在、図絵は所在不明となっていますが、幸いにも元図絵を複写したものが残されています。

雨乞の面は、真澄の記録には「竜王」とありますが、正式には「陵王（蘭陵王）」の面です。面の頭部に竜の飾りをあしらった特徴から「竜王」とも称されます。水を司る竜のイメージから雨乞の面として相応しいと考えられたのでしょう。また雨上げの面も、つりあがった目や「への字」に結ばれた口などの特徴が『絹篩』の図絵とも合致し、何より「鼻高」面であったことが、よりはっきりと分かります。



真山神社宝物二面之画複写
個人蔵（男鹿市）

強請雨乞

雨乞の多くはひたすら神仏に雨を願うもので、根底には神仏に対する畏怖や尊敬の念があります。ただ中には、神仏を虐げ、汚し、不自由を強いて、半ば脅すように強引に願いを叶えさせる強請祈願の雨乞がありました。

日記『男鹿の春風』より意訳

鹿子田（現在の男鹿市北浦篭田）を経て行くと、寝地蔵という石碑があった。梵字を刻んでいる。雨乞のときには、寝ている状態から起こして立て、上から田の泥を塗るという。すると、その汚れを清めようとして、天から雨が降ってくるという。

真澄が記録したように、わざと板碑に泥を塗り付け、その汚れを清めるために雨が降ることを期待した強請祈願であったと考えられます。かつては男鹿市北浦篭田に置かれていた寝地蔵板碑は、現在は道路を挟んだ向かいの出口野に移されています。

板碑でありながら、「地蔵」と呼ばれた由縁は、碑に刻まれた種子が地蔵菩薩を表すものだったからでしょう。藤田守氏が平成二十八年に作製した拓本（高さ136㎝、幅31㎝）からは、上部の左端に地蔵菩薩を表す「カ」の種字の一部分が確認できます。

寝地蔵の板碑拓本
藤田守『古碑景』より

地蔵菩薩
「ha（カ）」

寝地蔵板碑（男鹿市北浦）
R３．９月撮影

日記『男鹿の春風』より意訳

夫殿の窟（現在の南秋田郡八郎潟町真坂三倉鼻）というところがある。脚名槌の神を祀り、この神が忌むといって、村全体で鶏を飼うことをしない。しかし雨乞の際には、丑三つ時にこの窟に行き、雄鶏を別の村より求めて来て、刀でこれを刺し、その血を滴らせる。すると、かならず雨が降るという。もし、途中で鶏が鳴くようなことがあれば、雨乞は中止して、再び行うようなことはしない。

雨を祈願する対象の神が嫌う鶏、その血をあえて流すことによって神を虐げる、あるいは寝地蔵の板碑同様、血で汚し、その汚れを落とそうとして雨が降ることを期待する強請祈願であったと考えられます。

■その他展示で紹介した事例

▼雨乞の石

・玉明神の雨零玉と日照玉（大仙市）
『月の出羽路仙北郡』一巻より
・牡馬玉（美郷町）
『月の出羽路仙北郡』十巻より

▼雨乞奇談

・弥重郎の竜（横手市）
『雪の出羽路平鹿郡』十一巻より

など

深澤多市旧蔵資料の書簡から
狩野亨吉の暮らしぶりが…

深澤多市（明治七年～昭和九年）と言えば「『秋田叢書』の刊行」と「小野寺氏研究」で知られる横手に住んだ郷土史家です。

秋田叢書では、別集として菅江真澄集全六巻が刊行されたことはよく知られていますが、この六巻には真澄の日記が収められています。一方、本巻十二巻のうち八巻には真澄の地誌と勝地臨毫が収められています。ですから、秋田叢書は昭和初期における「菅江真澄全集」の様相を呈しているとも言えます。事実、昭和四十年代半ばから刊行された未来社『菅江真澄全集』では、大部分で秋田叢書を原稿として使っています。

一昨年六月、深澤多市の御子孫から多くの資料を寄贈していただきました。菅江真澄資料センター開設の平成八年、先代の方などから資料をお借りして、第一回企画展「県外の遺墨資料」をおこなった御縁に拠ります。

令和四年四月二十九日（金・祝）～七月三日（日）の開催となりますが、企画展「深澤多市―郷土研究と真澄研究の偉業―」を開催すべく、この一年はその資料整理に努めてきました。

資料整理の成果については展示で公開することになりますが、例えば、一万通は優に超えるであろう書簡を拾い読みしていて、興味深く思うものが数々ありました。しかし、展示構成にうまく組み入れることができないため、企画展では紹介できないものもまた数多くあります。ここでは、そのような中から一通の書簡を紹介します。

差出人は東京に住む国本善治。受取人はもちろん深澤多市です。

国本善治については多市の妹婿と説明されてきましたが、書簡で多市を「伯父上様」とすること等から、妹の子であることがわかりました。その国本善治は、秋田叢書刊行で大事な役割を果たしました。柳田国男が「白井秀雄と其著述」（『菅江真澄』所収）で名前を挙げてその編集能力を高く評価したほどです。詳しくは展示で紹介します。

ここで紹介する昭和三年十月五日付書簡の頃、九月一日に秋田叢書第一巻が刊行されて、国本善治はその販売のために東京に住む秋田出身の名士を訪ね回っている時期でした。販売とは刊行会の会員を募ることです。

書簡の概略はこうです。

菅礼之助（古河合名理事）が会員になり、叢書刊行は大事なことだと励まされた。

安藤和風（秋田魁新報）や中村木公（秋田新聞）などを動かさないとダメだと言われた。秋田に住む通称「石コオンツァ」（真崎勇助）のところに菅江真澄のものがあると教えられた。先日、狩野亨吉博士に会ったが、暮らしぶりが余りに気の毒だったので売らずに帰ってきた。

狩野亨吉は大館生まれ。三十四歳の若さで第一高等学校長となり、その八年後の明治三十九年には京都帝大文科大学の初代学長となった人物です。真澄関係では、まだ帝大（のち東京帝大）の学生時代に買い求めた大量の古書の中に真澄の《男鹿の島風》があり、父良知によって明治二十一年、佐竹侯爵家に献納されたことでも知られています。

狩野亨吉は、明治四十一年四十四歳で京都帝大を辞してから、昭和十七年七十八歳で亡くなるまで、清貧と呼ぶような暮らしだったとされます。退官後、狩野亨吉は親友の沢柳政太郎が総長をしていた東北帝大に蔵書を売り、その代金でまた東北帝大に納めるための本を買うなどしていました。書画鑑定を生業にするなどして、その関係で古本屋、古物商、屑屋などが出入りしていたと言います。

「しかし金がなかったわけではない。ただ、ものすごく本を買う。この人みたいに本を買ったらたいてい誰でも貧乏になる。だから、退官後貧乏になったのではなく、官に在ったころから貧乏だったのである」（亨吉の事項を含めて、高島俊男『本が好き、悪口言うのはもっと好き』）の言にも納得します。

国本善治の書簡のうち、狩野亨吉に関わる部分をそのまま紹介します。

先日狩野博士に会った時勧誘に行ったのですが「自分は今は古本の仲買の様な事で漸く暮して居るし本を見るなんて事は出来ない。自分の本を買ふなんて事はない。だが折角だから一冊丈け買はふ」と云って呉れましたが余りお気の毒な様でしたから売らずに来た様な次第です。

売らずに来たということは、秋田叢書第一巻を手渡したけれども、その代金のことを言い出せずに、そのまま置いてきたと読み取ることができます。狩野亨吉の暮らしぶりがあまりに気の毒だったからです。

昭和四年十一月、長野県松本に住む胡桃沢勘内（民俗学者）が東京本郷にある琳瑯閣という古書店から真澄の諸国民謡集と呼ばれる《ひなの一ふし》を入手します。この書冊について、真澄の自筆かどうか古書店にしても胡桃沢勘内にしても不安だったらしく、古書店では販売前に狩野亨吉から「自筆本に相違無い」とのお墨付きをもらっていました。胡桃沢も購入後、柳田国男と平福百穂に見せて、自筆だろうとの言葉をもらっています（《ひなの一ふし》の内容見本に拠る）。

深澤多市宛の一通の書簡から、秋田や真澄に関わる人々の交流が輪郭をもって眼前に現れてくるようです。それが資料を読むおもしろさだと実感しています。（松山）

編集後記

・令和３年４月６日、新聞の訃報欄が中国文学者高島俊男の逝去を伝えていました。一人暮らしであることは著作から推測していましたので、高齢者施設で亡くなったことにまず目がいき、そのことに安堵しました。高島俊男の文章に初めて触れたのは週刊誌に連載されていたエッセーでした。軽快で読みやすい文章に「言葉」への厳格な態度があらわれており、文章の読み方から用語の使い方まで随分影響を受けました。奇しくも本紙における私の締め括りの文章に名前を挙げることができて、これも巡り合わせなのだとひとり納得しています。（松山）

真澄
MASUMI
No.39

発　行　日◎令和４年（2022）３月11日
編集・発行◎秋田県立博物館菅江真澄資料センター
〒010-0124 秋田市金足鳰崎字後山52
TEL 018-873-4121（代）